

〈研究ノート〉

学生の地域活動を支える学内コーディネーション —「因幡の手づくりまつり」を事例として—

杉本 真由実・板倉 一枝・國本 真吾

Mayumi SUGIMOTO, Kazue ITAKURA, Shingo KUNIMOTO :

The Coordination by Tottori College for Supporting Students' Community Activities

—A Case of “The Inaba Handmade Festival” —

大学・短期大学における学生の地域活動支援の在り方を深めるため、「因幡の手づくりまつり」にスタッフとして参加した学生にアンケート調査を実施し、イベント参加に対する契機や動機、満足度など、主体形成に関する視点から分析を行った。これを土台として、地域活動に主体的に参加する学生への支援を学生教育の一環として行うための効果的なコーディネーションの在り方について検討した。

キーワード：地域活動 学生教育 主体形成 サービス・ラーニング (Service-Learning)

はじめに

総務省の「平成18年度社会生活基本調査」によると、鳥取県の「ボランティア活動の行動者率」は34.5%と全国1位の結果であった（全国平均26.2%）¹⁾。隣県の島根県も34.0%と、滋賀県と並んで全国2位である。このことから、山陰地方は全国的にもボランティア活動へ関わる県民の割合、そして意欲が高いと考えられている。学齢期では、ボランティアへの参加を促す目的から、社会福祉協議会を中心に「ボランティア体験事業」を展開し、それによる効果も関係していると考えられる²⁾。

一方、新世紀の教育改革の取り組みを示すものとして2001年に文部科学省から出された「21世紀教育新生プラン」では、重点戦略の一つとして「人間性豊かな日本人を育てるために」の章で、奉仕活動や体験活動を充実させることが挙げられている。また、

これらを受ける形で同年に学校教育法ならびに社会教育法が改正され、青少年のボランティア活動等社会奉仕体験の充実を図るための事業を実施すること、社会教育と学校教育の連携を図ることが明記された。さらに2002年には、中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」の中で、18歳以降の青年や勤労者等の個人の奉仕活動・体験活動を推奨するための方策、ならびにそれらを社会全体で推進していくための仕組み作りなどの提言がされた。近年では、2006年に設置された教育再生会議の報告の中で、高校生の奉仕活動必修化や大学教育にボランティア活動体験の導入などの提言もあり話題となった。

特に大学においては、2006年の教育基本法改正により、大学等の役割として従来からの教育・研究と合わせて、その「成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」という「地域貢献」の視点が新たに示された。また、2008年の中央教育

審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」では、高等教育機関が地域の人材育成や地域貢献機能の強化・拡大などについて地域との連携を図っていくことの重要性が示されている。

具体的には、教育・研究のフィールドを地域社会に移すだけでなく、いわゆる「産官学金連携」や学生のボランティア派遣、大学ボランティアセンター設置の試みや、大学生や卒業生によるNPO法人の組織化など、学生及びその近隣の年代の手による協働事業の開発が活発である³⁾。その実践例は拡大するとともに、地域社会との結びつきを強化する試みや機会が増加した。

そのような情勢の中、筆者らは地域社会で実施するイベント事業を素材として、特に大学生を対象とした地域との関係性の構築や、それに関わる活動を通じた主体形成の在り方に注目してきた。杉本・板倉・國本(2008, 以下前報告)では、「学生たちの地域活動への参加において、イベントの趣旨に共感・理解することもさることながら、地域住民や他大学の学生との『交流』という経験が、次回への参加意欲へと繋がる重要なポイント」とし、地域活動における「交流」経験や「集団編成」の工夫に配慮したコーディネート的重要性を指摘している。

そこで、本稿では前報告以後の継続的な調査を土台とし、地域活動に参加する学生へのコーディネーションの視点から、大学・短期大学における地域活動支援の在り方について深めたい。

1. 2009年度調査の概要

(1) 調査の目的

本稿のねらいは、地域活動に参加する学生の主体形成に寄与する学内コーディネーションを検討するところにある。そこで、前報告の調査の目的にある「地域活動に参加する中で、学生たちは何を期待し、何に満足し、また何を得ているのか」ということを継続的に測るとともに、さらに参加契機・動機を探ることを本調査の目的とする。

(2) 調査方法及び対象

「第13回因幡の手づくりまつり」(2009年5月31日実施)に学生スタッフとして参加した、鳥取短期大学の学生45名を対象に調査用紙を配布した。調査時期は、2009年6～7月である。

調査項目は23問に補足説明2問を加えた計25問であり、部分的に自由記述を設けた。設問への解答は、「そう思う」、「やや思う」、「あまり思わない」、「全く思わない」、「わからない」のいずれかを選択する5件法をとった。

(3) 調査結果

1) 回収率及び回答者の属性

調査用紙は40名から回収した(回収率89%)。回答者(学生)の属性・内訳は、鳥取短期大学国際文化交流学科3名(1年生2名・2年生1名)、生活学科食物栄養専攻17名(いずれも2年生)、幼児教育保育学科17名(1年生10名・2年生7名)、専攻科3名(国際文化専攻1名・食物栄養専攻1名・福祉専攻1名)である。当日の役割別で見ると、鳥取短期大学が企画したブースを担当した学生が22名、鳥取大学の企画や智頭街道商店街、鳥取環境大学が企画したブースを担当した学生が16名、受付を担当した学生が2名である(表1参照)。

2) 調査結果の概要

前報告において選定された7項目「満足度」、「ブース内での意思疎通」、「事前練習の効果」、「連絡・伝達」、「大学間交流」、「巻き込み意欲」、「次回への参

表1 回答者の属性

	本学 ブース	外部ブース		計
		ブース	運営	
国際文化交流学科	2	1	0	3
食物栄養専攻	17	0	0	17
幼児教育保育学科	3	14	0	17
専攻科国際文化専攻	0	1	0	1
専攻科食物栄養専攻	0	0	1	1
専攻科福祉専攻	0	0	1	1
計	22	16	2	40

加意欲」について、今年度の参加者の回答を分析した。なお、鳥取短期大学企画のブースを「本学ブース」、その他を「外部ブース」とした。分析に際しては有効回答のものを用いている（表2参照）。

①満足度について

「今回の『因幡の手づくりまつり』に参加して良かった」（問1）と答えている学生は39名であった。その理由として「子どもたちと関わることができた」としている者が9名、「他大学、地域の人などさまざまな人と交流できた」としている者が18名、その他の理由を挙げている者が8名であった。

②ブース内での意思疎通

「ブースの仲間とよく話し合い、意思疎通は出来た」（問7）としている学生は、33名であった。外部ブースを担当した学生に注目すると、「そう思う」、「やや思う」という肯定的な回答をしている者は13名（72%）であった。

③事前練習の効果

「手づくりまつり前に、ものづくりの練習は十分出来た」（問9）との問いに対し、「そう思う」、「やや思う」と答えている学生は、本学ブース19名（86%）、外部ブース11名（61%）であった。また、十分ではない、わからないという回答をしている者は本学ブース3名（13%）、外部ブース7名（38%）であった。

「手づくりまつり前の練習時間は、適正であった」（問11）との問いに肯定的に答えている学生は、本学ブース18名（82%）、外部ブース11名（61%）であった。外部ブースは問9、問11とも「そう思う」、「やや思う」と答えている回答者数は同じであるが、それぞれの質問の回答者は異なっている。

④連絡・伝達について

「スタッフ同士の連絡は、十分出来ていたと思う」（問18）の問いに対し、本学ブースの学生は22名（100%）が「そう思う」、「やや思う」と答えている。また、外部ブースの学生で肯定的に答えている者は15名（83%）であった。

⑤大学間交流

「他大学の学生スタッフと交流することが出来た」

（問21）の問いに、「そう思う」、「やや思う」と回答している学生は23名（56%）である。そのうち14名が外部ブース担当者、9名が本学ブース担当者であった。本学ブース担当の9名のうち、8名が事前に行われた全体会、もしくは終了後の片づけに参加しており、そのような機会を通して他大学の学生と関わりを持ったことが考えられる。

⑥巻き込み意欲

「手づくりまつりに、仲間をもっと誘ってみたいと思った」（問16）の問いに、「そう思う」、「やや思う」と回答している学生は、本学ブース20名（90%）、外部ブース17名（94%）であった。

⑦次回への参加意欲

「次回（2010年度予定）もスタッフで参加したい」（問23）の問いに、「そう思う」、「やや思う」と回答した学生は27名であり、うち17名は卒業学年である2年生であった。さらにこの中でも本学ブース担当者は10名、外部ブース担当者は7名である。

外部ブースを担当した7名に注目すると、「地域の商店街と連携した今回の取組みは、良かったと思う」（問19）、「手づくりまつりは、今後も大学全体からボランティアが集まり、取り組む意義がある」（問22）の2つの問いにおいて全員が「そう思う」との回答をしている。この学生たちは、大学がこのイベントに関わり地域と連携することの意義を強く感じていると考えられる。

また、次回も参加可能である1年生に注目すると、本学ブースを担当した学生の間23の得点平均は3.20であるのに対し、外部ブースを担当した1年生の得点平均は4.14であった。このことは、外部との関わりが、次回への参加意欲に何らかの影響を及ぼしているものと考えられる。

3) 補足質問部分について

本学学生への調査に限定して、今回は従来の調査項目に、新たに補足質問を2項目加えた。

①参加のきっかけ

参加のきっかけ、つまり第13回の開催と学内でのスタッフ募集をどのように知ったかという、情報の

表2 「第13回 因幡の手づくりまつり」に関する学生スタツ調査回答一覧

No	学年	担当ブー	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20	問21	問22	問23	補足1	補足2	
1	2	外部ブー	5	4	4	4	4	4	3	4	3	4	2	4	5	4	5	5	4	3	5	5	4	5	4	5	1,3	
2	2	外部ブー	5	4	4	3	5	5	4	5	3	5	5	4	4	4	2	2	2	4	1	1	4	3	1	3	4	
3	1	本学ブー	5	5	4	3	5	4	4	4	3	4	3	4	5	5	5	5	4	4	5	5	3	5	1	3	1,2,3,4	
4	1	本学ブー	5	3	N/A	5	3	5	N/A	4	3	4	5	N/A	5	5	5	4	3	5	5	4	3	5	4	3	4	
5	1	外部ブー	4	4	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	N/A	4	1	1	4	4	4	4	4	1	3	4
6	1	外部ブー	4	3	4	3	1	5	3	4	4	3	4	4	5	4	4	4	5	4	4	4	4	4	1	3	4	
7	2	本学ブー	5	5	4	4	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	1	5	5	5	2	4	1	1	4	
8	2	本学ブー	5	5	5	4	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	3	5	5	5	3	5	1	1	4	
9	2	本学ブー	5	5	4	3	3	4	5	4	4	4	4	4	5	4	5	5	4	5	5	5	5	5	4	3	1,2,4	
10	2	外部ブー	5	4	4	3	4	4	5	4	5	5	5	5	5	5	3	5	2	5	5	5	5	5	4	5	2,3,4	
11	2	外部ブー	5	4	4	4	5	4	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	2,3,4	
12	2	外部ブー	5	4	2	2	3	3	3	4	3	4	2	4	4	5	4	5	5	2	5	4	5	5	5	3	2,3,4	
13	2	外部ブー	5	5	5	5	4	4	4	4	5	5	4	4	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	1	4	2,4	
14	1	外部ブー	4	3	5	4	3	4	3	3	2	3	3	5	5	5	5	5	3	5	5	5	2	4	4	3	3	
15	1	外部ブー	5	5	5	3	4	5	5	5	4	4	4	4	5	5	5	5	4	4	5	4	5	4	4	4	2,4	
16	1	外部ブー	5	5	3	1	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	2	5	2	5	5	5	5	5	5	4	2	
17	1	本学ブー	5	5	3	2	1	4	4	4	4	4	1	4	3	4	1	4	4	4	4	5	5	1	5	1	4	2,4
18	1	外部ブー	5	4	4	2	5	1	5	4	3	4	3	5	5	5	5	5	4	4	4	5	4	3	5	4	3	2,4
19	1	外部ブー	5	5	4	3	5	4	4	4	4	4	5	4	5	5	5	5	5	4	4	5	5	4	5	4	4	2,4
20	1	外部ブー	5	5	4	3	4	3	5	4	4	4	4	3	4	5	4	5	4	5	5	5	1	5	4	3	2,4	
21	1	外部ブー	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	4	4	5	5	5	5	4	5	4	4	4	
22	1	本学ブー	5	4	3	N/A	5	3	4	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3	5	5	3	2	
23	2	外部ブー	5	4	4	4	4	4	5	5	5	4	5	4	5	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	2	
24	2	外部ブー	5	5	4	3	4	4	5	4	5	4	3	4	5	4	5	4	5	4	5	5	4	5	5	3	4	
25	1	本学ブー	5	5	4	4	4	4	5	5	5	4	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	3	5	5	3	2,4	
26	2	外部ブー	4	4	4	1	1	1	4	4	2	1	5	1	4	5	1	5	5	5	5	5	1	5	5	2	2	
27	2	本学ブー	4	4	5	4	4	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	2	
28	2	本学ブー	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	2,4	
29	2	本学ブー	5	3	3	4	4	4	5	4	4	4	4	5	5	4	5	4	4	4	4	4	3	4	3	N/A	2	
30	2	本学ブー	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	3	3	2	4	4	4	4	3	4	3	4	3,4
31	2	本学ブー	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	N/A	N/A
32	2	本学ブー	4	5	5	4	4	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	4	5	4	5	4	3	3	3	N/A	N/A	
33	2	本学ブー	5	5	4	3	4	4	5	5	4	4	5	5	5	4	5	4	4	5	5	5	4	5	4	N/A	N/A	
34	2	本学ブー	5	5	5	1	5	5	5	5	5	1	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	3	5	2,4	
35	2	本学ブー	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3	5	5	5	5	5	4	1	4	
36	2	本学ブー	5	5	4	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	1	5	4	5	4	1	4	
37	2	本学ブー	5	5	5	3	4	4	4	5	4	4	3	4	5	5	5	5	4	5	5	5	4	4	4	4	1	1,2,4
38	2	本学ブー	N/A	5	5	3	5	4	5	5	4	4	4	5	5	5	5	5	5	4	4	5	2	4	4	N/A	N/A	
39	2	本学ブー	4	4	4	5	4	3	2	4	3	3	3	3	5	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	1	N/A	N/A
40	2	本学ブー	4	5	4	3	4	3	4	5	5	4	5	5	5	4	5	5	4	5	5	5	5	5	4	1	4	

インプット（入力）に関する部分を問うた。回答としては、「スタッフ募集のポスター（学内掲示）を見て」が最も多く、回答数は14名であった。学科・専攻などの属性による違いは特にない。ポスターは学内の掲示板だけでなく、階段の踊り場や教員研究室など、学生の目につきやすい位置に数多く掲示した。また、昨年の様子の写真を入れるなどし、視覚的にとらえやすいデザインになるよう配慮したため、それによる効果と考えられる。

次いで多かったのが「スタッフ募集のチラシ（授業配布時）を見て」との回答であり、回答数は8名であった。今年度は過去と比較し、スタッフ全体会の開催が早い時期に設定されていたため、ポスター掲示による呼びかけに加え、チラシによる広報活動も行い、早期に学内スタッフを確定する形をとった。教員が直接チラシを配布・説明することにより、イベント内容を詳細に伝えることが出来、それにより効果があったと考えられる。

「その他」と回答している者は5名で、うち4名は「昨年も参加して楽しかったため」との理由を挙げている。一過性の参加ではなく、継続してスタッフ参加する学生の割合が高まることは、過去の参加における満足度との関係で捉えることも出来るだろう。

②参加動機

参加動機として最も多かった回答は「ボランティア活動に興味があったから」であり、回答数は27名であった。次いで多かったのが「子どもと関わりたいから」であった。参加動機部分は複数回答可としており、この両方の理由を選択している学生は15名あった。

「他大学の学生と関わりたいから」という回答をしている学生は7名あり、うち5名は外部ブースへ参加していた。

2. 過去の調査結果との比較

本学においては、2007年度の第11回以降の3年間、

スタッフとして参加した学生にアンケートを行ってきた。ここでは、その3年間での変化、及び本学ブース、外部ブース間での得点平均の特徴について挙げてみる（表3参照）。なお、前回調査までの学生スタッフの属性は表4及び表5に示す。

(1) 年度ごとの特徴

ここでは、年度ごとに、全体得点平均の値が3年間で最も高い項目を挙げ、その特徴を検討する。

1) 2007年度

2007年度は、問3、問5、問7、問10、問15、問20、問21の項目の得点平均値が3年間で最も高い。これらの項目が高いことから、自分の役割が果たせ、子ども達への対応にも自信を持っていたことが考えられる。また、智頭街道商店街と初めて連携した年でもあり、実際に智頭街道で行えなかったことから次年度以降へ大きな期待を持っていたこと、さらに、他大学のブースへ参加した学生が多かったこともあり他大学生との交流ができた者が多かったということが伺える。

2) 2008年度

2008年度は、問4、問6、問12、問17、問19の得点平均値が高い。この年度は、事前準備がきちんでき、それにより失敗することが少なかったと考えられるが、その要素として、本学担当のブースが増えたことが挙げられる。2007年度まで本学からは食物関係のブースのみを出していたが、この年度には「絵はがき」、「竹でつくってあそぼう」が加わり、本学の学生のみで担当するブースが増えた。つまり、準備・練習などがすべて本学でできるため、より時間をかけて事前準備に取り組めたと考えられる。また、この年度は智頭街道商店街を会場として開催した年でもある。商店街との連携を目の当たりにし、この取り組みの効果をより身近に感じられたのではないかと考える。

3) 2009年度

2009年度は問1、問2、問8、問9、問11、問13、問14、問16、問18、問22、問23の得点平均値が高い。

表3 過去3年間の得点平均(学外ブース・本学ブース・全体)

	'07学外 n=14		'07本学 n=14		全体平均 n=28	
	問1	4.33	4.43	4.43	4.38	* 1
問2	4.00	4.54	4.54	4.26	* 2	
問3	4.08	4.36	4.36	4.23	* 1	
問4	2.71	2.86	2.86	2.79		
問5	3.93	4.14	4.14	4.04		
問6	2.92	4.07	4.07	3.52	* 2	
問7	4.29	4.57	4.57	4.43		
問8	3.86	4.54	4.54	4.19	* 2	
問9	3.07	4.38	4.38	3.70	* 2	
問10	4.21	4.08	4.08	4.15	* 2	
問11	3.07	3.85	3.85	3.44	* 2	
問12	4.00	4.21	4.21	4.11		
問13	4.71	3.93	3.93	4.32		
問14	4.50	4.29	4.29	4.39		
問15	4.07	4.71	4.71	4.39		
問16	4.29	3.93	3.93	4.11		
問17	4.43	3.43	3.43	3.93		
問18	3.79	4.14	4.14	3.96		
問19	4.36	4.36	4.36	4.36		
問20	4.79	4.64	4.64	4.71		
問21	4.29	3.29	3.29	3.79		
問22	4.36	3.93	3.93	4.14		
問23	3.29	2.07	2.07	2.68		

* 1 n=26

* 2 n=27

	'08学外 n=11		'08本学 n=12		全体平均 n=23	
	問1	4.36	4.92	4.92	4.65	
問2	3.91	4.42	4.42	4.17		
問3	3.64	4.42	4.42	4.04		
問4	3.27	4.10	4.10	3.67	* 1	
問5	3.73	4.00	4.00	3.87		
問6	3.73	4.50	4.50	4.13		
問7	3.82	4.42	4.42	4.13		
問8	3.64	4.58	4.58	4.13		
問9	3.00	4.08	4.08	3.57		
問10	3.64	4.25	4.25	3.96		
問11	2.82	4.17	4.17	3.52		
問12	3.91	4.75	4.75	4.35		
問13	4.18	4.92	4.92	4.57		
問14	4.45	4.50	4.50	4.48		
問15	3.45	4.83	4.83	4.17		
問16	4.55	3.67	3.67	4.09		
問17	4.45	3.92	3.92	4.17		
問18	4.09	4.42	4.42	4.26		
問19	4.73	4.67	4.67	4.70		
問20	4.36	4.67	4.67	4.52		
問21	4.09	3.08	3.08	3.57		
問22	4.55	4.42	4.42	4.48		
問23	3.45	3.00	3.00	3.22		

* n=21

	'09学外 n=18		'09本学 n=22		全体平均 n=40	
	問1	4.78	4.76	4.76	4.77	
問2	4.28	4.59	4.59	4.45		
問3	3.94	4.29	4.29	4.13		
問4	3.06	3.76	3.76	3.44	* 1	
問5	3.78	4.14	4.14	3.98		
問6	3.61	4.32	4.32	4.00		
問7	4.11	4.52	4.52	4.33	* 1	
問8	4.11	4.64	4.64	4.40		
問9	3.78	4.23	4.23	4.03		
問10	3.89	4.05	4.05	3.98		
問11	3.78	4.27	4.27	4.05		
問12	3.94	4.62	4.62	4.31	* 1	
問13	4.67	4.77	4.77	4.73		
問14	4.61	4.59	4.59	4.60		
問15	4.20	4.59	4.59	4.38	* 1	
問16	4.56	4.50	4.50	4.53		
問17	3.94	3.86	3.86	3.90		
問18	4.17	4.55	4.55	4.38		
問19	4.67	4.55	4.55	4.60		
問20	4.50	4.68	4.68	4.60		
問21	3.83	3.45	3.45	3.63		
問22	4.67	4.55	4.55	4.60		
問23	3.67	3.32	3.32	3.48		

* n=39

表4 2007年度の回答者の属性(第11回)

	本学 ブース	外部ブース		計
		ブース	運営	
食物栄養専攻	12	5	1	18
住居・デザイン専攻	0	2	0	2
幼児教育保育学科	0	7	0	7
専攻科福祉専攻	0	0	1	1
計	12	14	2	28

表5 2008年度の回答者の属性(第12回)

	本学 ブース	外部ブース		計
		ブース	運営	
食物栄養専攻	9	1	0	10
幼児教育保育学科	3	6	2	11
専攻科福祉専攻	0	2	0	2
計	12	9	2	23

事前準備の時間や、当日の子どもとのふれあいなどに対する満足度が高いことが伺える。この年度も智頭街道商店街を会場にして開催され、また、本学からのブースも「みたらし団子」、「ドーナツ」、「マイコンとセンサー初体験コーナー」、「竹でつくってあそぼう」、「きのこちゃん」の5ブースであった。本学の学生のみで構成されるブースが多く、連絡や準備などが十分できていたと考えられる。また、この年度は鳥取大学で開催された学生打ち合わせや全体会への参加者が非常に多い年であった。そのような姿勢から、学生の参加意欲が高かったこと、学生ボランティアが参加する意義を強く感じていたということが考えられる。

この年度を総括的に見ると、全体的にブース間での得点平均差が縮まっているのが特徴的である。さらに、「他大学の学生スタッフと交流することが出来た」(問21)の問いに対する回答の得点平均値が、外部ブースは3.83であり、これは外部ブースの平均としては3年間の中で最も低い。対比的に、本学ブースは3.45であり、3年間の本学ブース平均値の中で最も高い数値である。

(2) ブース属性間の得点平均差

ここでは、本学ブース、外部ブースの属性間で、得点平均の差が1.0以上確認された項目について検討する。

1) 事前準備

「手づくりまつり前に、適正に材料や道具をそろえることが出来た」(問6)は、2007年度は本学ブースと外部ブース間の差は1.15で、本学ブースの方が高い。その差は、2008年度0.77、2009年度0.71と、いずれも本学ブースの方が高いが徐々に縮まっている。外部ブースに注目すると、2007年度は2.92だが、2008年度では3.73、2009年度では3.61となっており、2007年度と比較すれば以降の2年間の得点平均は上がっている。

2) 事前練習

「手づくりまつり前に、ものづくりの練習は十分出来た」(問9)は、いずれの年度も本学ブースの得点が高いが、2007年度1.31、2008年度1.08、2009年度は0.45と、徐々にその差は縮まっている。

関連して、「手づくりまつり前の練習時間は、適正であった」(問11)は、いずれの年度も本学ブースの得点が高いが、2007年度0.77、2008年度1.35、2009年度0.49となっている。2008年度は、外部ブース担当者の得点平均が低いことから、外部ブース担当者が練習時間の不足を強く感じた年であったことが推測できる。

3) 来客者の呼び込み意欲

「子どもたちに、もっと自分のブースに来て欲しいと思った」(問15)は、いずれの年度も本学ブースの得点が高く、年度ごとで見ると得点平均の差は、2007年度0.64、2008年度1.38、2009年度0.39となっている。2008年度は、本学の食物ブースの配置位置が建物内であり、参加者から分かりにくい位置にあった。それが影響しているものと推測される。

4) 他のブースへの興味

「自分が担当したもの他に、担当したいブースがあった」(問17)は、いずれの年度も外部ブースの得点平均が高い。本学ブース、外部ブースの差で見

ると、2007年度1.00、2008年度0.54、2009年度0.08と、年々その差が縮まっている。

5) 大学間交流

「他大学の学生スタッフと交流することが出来た」(問21)は、いずれの年度も外部ブースの得点平均が高い。年度ごとに本学ブース、外部ブースの差で見ると、2007年度1.00、2008年度1.01、2009年度0.38である。2007、2008年度ともに他大学のブースに参加した学生があったが、2009年度は他大学ではなく、商店街や職人のブースを担当した学生が多かった。そのため、2009年度はブース間の差が小さくなったものと推測できる。

6) 次回への参加意欲

「次回もスタッフで参加したい」(問23)は、いずれの年度も外部ブースの得点平均が高い。ブース間の差で見ると、2007年度1.21、2008年度0.45、2009年度0.35であり、差が徐々に縮まっている。

7) その他

事前準備や練習、大学間交流などは、本学ブースと外部ブースという属性間で意識に差が出やすい項目である。年度や項目にもよるが、差が大きかったものが縮まってきている傾向にあるといえる。一概に、どちらかの属性の平均値が高くなった（もしくは低くなった）ため、得点差が縮まったということはないが、これは興味深い点である。

3. 総 括

(1) 3年間の調査結果から

1) 「集団編成」, 「交流」という視点から

筆者らは、前報告において集団編成の工夫が次回への参加意欲に何らかの影響を及ぼすとした。2008年度、2009年度の参加者で、単身で外部ブースを担当した者は、2008年度3名、2009年度2名(2年生)であった。「次回もスタッフで参加したい」(問23)に対して、2008年度については3名のうち「あまり思わない」が1名(当時1年生)、「わからない」と答えている者が1名(当時卒業学年)であった。ま

た、2009年度については1名が「わからない」としている。2007年度では、当日のブース変更に伴い、複数で外部ブースを担当することになった者、単身で担当することになった者の間で、次回への参加意欲の回答に差が生まれた。しかし、その後の2年間については自身が希望して単身で外部ブースへ参加している者もあり、明らかな差は認められない。

前報告では、地域住民や他大学の学生との交流が次回への参加意欲へとつながる重要なポイントとしている。2008年度、2009年度実施の調査においても、本学ブースに比べ外部ブースを担当した学生の方が次回への参加意欲が高い傾向にあり、同様の事が言えるであろう。しかし、本学ブース、外部ブースともに年々得点平均が高くなっており、その差も縮まってきている。また、調査結果でも述べたように、2009年度については本学ブース担当者の「他大学の学生スタッフと交流することが出来た」(問21)に対する得点平均が、3年間の本学ブース担当者の回答のうちで最も高い値を示している。2009年度は実行委員会から学生へのメール連絡が頻繁に行われ、また、学生からの質問に対しても個別にきちんと返答されていた。そういったやり取りや、また、全体会、事前準備等に参加することで、外部のブースを担当せずとも他大学の学生と交流しているという意識を持つ事ができたのではないだろうか。

本学の学生が鳥取大学の学生や地域の方と交流するにあたり、懸念されるのが交通手段である。開催当日や事前打ち合わせで鳥取県東部へ出かけなくてはならないため、中部・西部に居住する学生にとっては時間的、金銭的な面でも負担となる。2009年度は、学生打ち合わせや全体会などに、本学のスクールバス(もしくはマイクロバス)を運行した。このような移動保障を事前に提示し、実施することで、学生が安心して地域活動へ参加することに繋がるのであろう。

2) 参加のきっかけ、動機

2009年度調査で、ポスターやチラシによる広報活動が、学生の参加のきっかけとなっていることが分

かった。デザインや掲示場所など、様々な工夫をしている効果であるといえよう(図参照)。また、本学からは3名の教員が関わっており、それぞれが窓口となっているため、学生にとっては日常的に質問が容易な環境でもある。教員の関与によって、学生にとっては教員が「心の杖」のように安心感を与え、学生の主体的な参加へとつながるのではないだろうか。

また、参加動機として「ボランティア活動に興味があったから」、「子どもと関わりたかったから」としている学生が多いのも注目したい。子どもと関われるイベントである「因幡の手づくりまつり」は、学生にとって興味あるものであり、さらに「他大学や地域との交流」という要素が加わることで、参加意欲が強まったのではないかと考えられる。

(2) コーディネーション体制の在り方

以上のような、3年間にわたり取り組んできた成果を基にして、学生の地域活動を支援する学内コーディネーションの在り方について検討したい。特に、

筆者らの意識としては、地域活動への参画を通じた学生の主体形成にあり、その点を含んだ体制づくりが今後の課題となる。

1) 「ボランティア活動」から「地域活動」へ

日本学生支援機構が実施した「大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書(平成20年度実施)」によると、大学が学生のボランティア活動への支援の成果について『学生のコミュニケーション能力の向上に役に立つ』『学生の学ぶ姿勢や意欲の向上に役に立つ』『学生の公共の精神やマナーの向上に役に立つ』などを半数以上の大学等があげている」としている(日本学生支援機構, 2009)。設置者別で見た場合、「国公立は『地域社会からの大学等への評価が高まる』『学生同士の人間関係づくりに役に立つ』との評価が高い。私立は『学生の学ぶ姿勢や意欲の向上に役に立つ』を上位にあげている」と、国公立間の「課題解決への期待の違い」を指摘した。

また岡幸江(2008)は、「ボランティア」と「教育活動」の両者間には「基本的な性格において本質的

子どもと一緒に「ものづくり」体験を！ 他大学の学生と一緒にイベントを作ろう！ 

鳥取大学・鳥取環境大学の学生と協力してつくる日本最大級の「ものづくり」イベント

第13回 因幡の手づくりまつり

とりたん学生スタッフ募集中！

子どもの頃、自分で紙を折ったり、木を削ったりしてものを作った経験はありますか？
「因幡の手づくりまつり」は、子どもたちに、熱中してものを作る楽しさや、匠たちの伝統の技にこめられた知恵・工夫、また、ものにこめられた心を感じとれるようになって欲しいというイベントです。

昨年は約1300人の参加者で、ものづくりのイベントとしては日本最大級！鳥取短期大学のほか、鳥取大学・鳥取環境大学が、地域の商店街の人たちと一緒にこのイベントをつくっています。

そこで、子どもたちと一緒に匠から学び、また、子どもたちにものづくりを教えてくれる「スタッフ」を募集します。「子どもと何かしたい！」「いろいろな人と関わりたい！」、そして「他大学の学生と交流したい」という理由でもOK！あなたの協力を待っています。

★イベント日時・会場★
5月31日(日) 午前10時～午後3時30分
鳥取市・智頭街道商店街(吉吉から移動用のバスを配車予定)

★スタッフとしてやること★
手づくりまつり当日のものづくり指導、イベント運営
※当日までの職、他大学や「匠」を訪ねて準備や練習、打ち合わせを行います

★ものづくりの例★(昨年の場合)
光る泥だんご、スーパーボールづくり、木で作るイス
マジックスクリーン、シルクスクリーン
割れないジャンボン玉、貝のストラップ
さくら餅・ドーナツ、竹細工(鳥短企画) など約50種類

興味がある人は、気軽に話を聞きにきてね♪

國本 真吾先生(幼教) C305、事務室学生課
板倉 一校先生(国際) ... D204、地域交流センター
杉本 真由美先生(幼教) A456

図 「第13回因幡の手づくりまつり」学生スタッフ募集ポスター・チラシ

な矛盾が存在」するとし、その矛盾を克服するための留意点や方向性を整理しながら、その中での可能性としての「サービス・ラーニング (Service Learning)」を取り上げている。唐木清志 (2002) によると「サービス・ラーニング」とは、「注意深く組織されたサービス経験 (地域社会で展開される人や社会のニーズを充たすことを目的とした体験活動) へ活動的に参加することを通して、若者が学習し成長することを目的」としたものとされる。これを踏まえて岡は、『ボランティア』と『教育』の本質的矛盾をこえて、若者が変わりサービスの受け手も充足するという『学校におけるボランティア活動』のある種の存在を意味づけることができるものとして、大学における「サービス・ラーニング」への注目を促している。

とりわけ、近年大学等で教育改革のために盛んに行われている各種の優れた取り組み (GP) の中には、この「サービス・ラーニング」の取り組みを行っているもの、またはその手法を取り入れたものなども多く見受けられる⁴⁾。また、大学で必修化されているファカルティ・ディベロップメント (FD) の事例の一つとして、ボランティア活動を正課プログラムの中にどう入れ込むかという、サービス・ラーニングに関する内容の発表が行われている⁵⁾。

以上のことを踏まえると、本研究の対象とした「因幡の手づくりまつり」のような地域におけるイベントを通じた学生教育の可能性として、第一に学生間の人間関係形成や学習意欲の向上といったことが期待されよう。第二は、学生の主体形成を目論み、教養・専門教育科目とは別の構造化された教育活動への期待に応えることが可能となる⁶⁾。そのような教育効果を期待する意味から、本稿を含めたこの間の一連の研究では、「ボランティア活動」という表現ではなく敢えて「地域活動」と表現してきた。また、「因幡の手づくりまつり」に関わる学生に対しても、「学生ボランティア」ではなく「学生スタッフ」と表現し、あくまで「ボランティア」は自発的な意志という精神面に限定した意味合いで使用してきた。そ

こには教育機関としての責任と使命を、より明確にするための意図があったからである (國本・板倉・塩野谷・土井, 2006)。つまり、大学が明確に「大学組織の使命として社会貢献を掲げ、その教育活動の一環として取り組む姿勢が、学生の自発性を促す条件」として必要となる (鳥取大学地域学部地域教育学科学習科学講座生活能力論分野, 2006)。

2) 仕掛けづくりとしての学内コーディネーション

新崎国広 (2008) は、教員養成大学における学校外ボランティアに関連して「学生と教師とボランティア・保護者といった立場の異なる者同士が学習支援者となり、相互に対話することによって、学校教育の本質的課題に気づき、相互のモチベーション (内的動機付け) を高めていく」期待から、学習の主体者である子どもや学習支援者にも学びをもたらす「学びの相互作用システム」の構築を説いている。そのシステムには、「学生の主体性を引き出すための導入教育 (オリエンテーション) やボランティア・コーディネーションが重要な役割をもつ」と強調している。

例えば、「因幡の手づくりまつり」を振り返ると、学内に掲示されるポスターや授業配布時のチラシに触発された学生が、いきなり窓口となる地域交流センターや教員にスタッフ登録する方法ではなく、告知された学内説明会に出席することを通して、最終的に参加を判断する形をとっている。この学内説明会は、新崎のいう導入教育の側面があるわけだが、説明会に出席して不参加を決めたとしても、そこには主体的な作用が働いていることになる。

しかし、その次に検討すべき「ボランティア・コーディネーション」については、現状としては未完成の部分があることは否めない。そこで、新崎が示した「コーディネーション過程」を参考に、学内コーディネーションを高めるプロセスを表6に示した。新崎は「開始期」「作業期」「活動終了後」3期に区分し、いわゆるPlan-Do-See(Check) [計画-実行-評価] サイクルをそこにあてはめることが出来る。表6では「開始期」の前に「開始前」を加え、

表6 地域活動における学内コーディネーション過程（新崎 [2008] を基に作成）

	コーディネーションの具体的内容	ソーシャルワーク機能
開始前	【募集広報活動】 ・必要情報の提示、ポスター掲示・チラシ配布	〔照会対応機能〕 ・問い合わせへの個別対応 ・口頭説明による活動内容の伝授
開始期	①オリエンテーション ・事業の概要説明 ・活動目的、活動内容等説明 ②不安や活動動機を傾聴する	〔ケースワーク機能〕 ・参加への不安の受容、ラポール(信頼関係)の形成 ・活動内容を理解してもらう ・個々の活動の特徴を把握する
作業期	【活動中のアドバイス】 ・他の参加者とのコミュニケーションが促進できるよう具体的なアドバイス ・不安や緊張が軽減するよう、個別にアドバイス	〔個別スーパーバイズ・カウンセリング機能〕 ・問題の意識化 ・気づきへの尊重と承認 ・個別化
	【活動状況へのコメント】 ・個々の気づきへのサポート ・個々の気づきを普遍化して反省会で取り上げて話し合う	〔メール等での個別スーパービジョン〕 ・各自にコメントを送信する ・気づきへの尊重と承認
	【反省会・ふりかえり】 ・参加者同士が、個々の気づいた点を共有し、意見を交換し合う	〔グループワーク機能〕 ・多様な価値観が存在することを、確認し合えるよう促す
活動終了後	【総括反省会】 ・作業期の活動をふりかえっての話し合い ・全活動終了後、事後感想文を提出してもらう ・参加者アンケートを実施して提出してもらう 〔情報提供〕 ・他の活動を紹介する	〔事後評価・ふりかえり〕 ・個々が何を学んだかを明確にし、それを今後の活動にフィードバックする ・必要に応じて主催者へフィードバックする 〔社会資源の提供〕 ・様々な地域ニーズがあることを伝える

Planの前段として、「認知」(recognize)の過程があることを別にした。それぞれの段階で、コーディネーションを掌る者（因幡の手づくりまつりでは教員）との相互のやり取りを重ね、コーディネート役はソーシャルワークの視点からの学生（場合によっては主催者側へ）に対するフォローを実施していく。学生にとっての学びは、「多様な価値観の存在」を、学生間や活動に関わる他の人間との交流を通じて理解し、そのようなコミュニケーションによって社会的な諸能力を高めていく機会を体験することになる。また、「因幡の手づくりまつり」であれば、子どもや地域住民を対象にした活動であり、それらの参加者からの感想や声を学生に伝えることで、活動への感謝の声をもとに学生の自己有用感を高め、「所属と愛情欲求」「自尊欲求」を満たす事が考えられる。このような肯定的な体験の繰り返しにより、平素の生活においても様々な活動に主体的に関わるようになることが期待されてくるであろう。

おわりに

近年、学校現場では中学校での職場体験実習や高等学校における様々な体験活動を通じて、学齢期から社会との接点を持ち、自身の進路決定へと結びつける実践が多くなってきている。それらの経験が、大学生の時期のボランティア活動への参加意欲にも繋がっているということも考えられるが、教育機関が安易にボランティア活動を奨励するだけでは、教育機関としての使命を全うしたことにはならないだろう。無論、事前・事後学習はこのような活動においても重要ではあるが、教員（大学においては職員を含めて）が意図的に関与しなければ、児童生徒・学生の主体形成に寄与することは困難である。活動で留意したいのは、関わる人間や活動そのものが独善的な姿勢に陥らないよう、双方向のやりとりによる相互作用を契機に、必要に応じてズレを修正するところにある。地域と学生・大学に隘路が生ずれば、地域活動そのものの意義が薄れ、大学に対する地域

からの評価が損なわれかねない。地域貢献が大学の「第三の使命」と言われる現代において、ボランティアや地域活動を無意図的な形で留めるのではなく、積極的に組織化する営みこそが、地域社会における大学が果たす役目としてさらに重要になるだろう。

注

- 1) 総務省「平成18年度社会生活基本調査結果」
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/index.htm>
- 2) 高校生以上を対象として、鳥取県社会福祉協議会が1985年度より「ボランティア体験事業」を夏季に実施している。中学生を対象としたものとしては、同様な事業を市町村社会福祉協議会が窓口となり実施している。
- 3) 鳥取県内には、大学ボランティアセンターとして「鳥取大学ボランティアセンター」(2007年3月閉鎖)の試みが、それを継承する形で「NPO法人学生人材バンク」などの活動が存在する。
- 4) 例えば、代表的なものとして、大学内にサービス・ラーニング・センターを設置している国際基督教大学の「国際サービス・ラーニングの展開と連携構築(実践型国際教養教育のアジア・アフリカネットワーク形成)」(2005年度戦略的国際連携支援GP)、上智短期大学の「サービスラーニングによる学生支援の総合化—ライフデザインと社会人基礎力の養成」(2008年度学生支援GP)などがある。
- 5) 例えば、第13回FDフォーラム(關大学コンソーシアム京都主催、2008年3月開催)においては、現代GPの助成を受けた立命館大学の事例(「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」)が取り上げられた。
- 6) 例えば、筑波大学人間学群では「サービス・

ラーニング」の理念と方法を取り入れた、新たな大学教育の展開を試みている。詳しくは<http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun/k-pro/>を参照。

参考文献

- 新崎国広「学校外ボランティアにおける今後の課題」日本教育大学協会学校外ボランティアの質的向上検討プロジェクト「ボランティアと教育に関する諸問題と教育系大学・学部での取り組みについて」、2008年、pp.103～111
- 唐木清志「子どもの社会行動を支援するサービス・ラーニングの教授方略—ルイス(Barbara A. Lewis)の場合—」『福祉教育・ボランティア学習研究年報』第7号、2002年、pp.244～264
- 國本真吾・板倉一枝・塩野谷齊・土井康作「地域活動を通じた学生の主体形成に関する研究—『第8回伯耆の手づくりまつり』アンケートから—」『鳥取短期大学研究紀要』第54号、2006年、pp.73～82
- 日本学生支援機構「平成20年度 大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」2009年
- 岡幸江「ボランティアの理念と教育活動」日本教育大学協会学校外ボランティアの質的向上検討プロジェクト「ボランティアと教育に関する諸問題と教育系大学・学部での取り組みについて」、2008年、pp.7～14
- 杉本真由実・板倉一枝・國本真吾「学生の地域活動への参加意欲に関する考察」『鳥取短期大学研究紀要』第57号、2008年、pp.57～64
- 鳥取大学地域学部地域教育学科学習科学講座生活能力論分野「平成17年度 地域貢献支援事業報告書 “地域貢献力” 養成プログラムの開発」2006年。

【補足質問】

問1：「第13回因幡の手づくりまつり」（2009年5月31日実施）への参加について、そのきっかけを一つ選んでお答えください（複数要素がある場合は、一番決定的なものを選択）。

- 1) 教員に誘われたから → その教員の名前をお書きください ()
- 2) 友人に誘われたから → その友人の名前をお書きください ()
- 3) スタッフ募集のポスター（学内掲示）を見て
- 4) スタッフ募集のチラシ（授業配布時）を見て
- 5) その他 ()

問2：問1に関連し、今回参加されるに当たり、どのような思いで参加されたかをお答えください（複数回答可）。

- 1) イベントの開催趣旨（＝ものづくりの大切さを伝えること）に共感して
- 2) 子どもと関わりたかったから
- 3) 他大学の学生と関わりたかったから
- 4) ボランティア活動に興味があったから
- 5) その他

【自由記述】

--